

サトヤマを世界に ①

農村漁村研究者 あん・まくどなるどさん



国連大学高等研究所
いしかわ・かなざわ
オペレーティング・
ユニット。長い名前
の組織が今年四月、
金沢市に発足した。
国連の地域密着型研
究所で、北信越を舞
台に里山・里海の環
境を研究し世界に発
信するのが任務だ。
日本滞在歴二十年の
カナダ生まれの女
性、あん・まくどな
るどさん(42)が所
長に就いた。
私は生態学者でも環境
科学者でもありません。

ただ日本の農漁村の暮らしに魅せられ、もう二十年も農業や漁業の現場を歩き回ってきました。だから農村漁村研究者と名乗ったりもします。国連の仕事は私が愛する日本の農漁村について世界に向けて情報を発信できるまたとない機会。そう思って宮城大学の学長に頭を下げて、任期途中で准教授を辞めて金沢に来ました。
農漁村への関心から思わぬ道歩んだ。
一九八八―一九八九年の熊本大学留学中に経

■日本の村を歩いて20年 金沢で国連地域研の所長に



験した「イクサ植え」が転機だった。友人の紹介で実現した農業体験。準備のため前の晩にみんなでイグサの苗を一株ずつ分ける作業をした。十一月下旬、土間に輪になって座っていると、お尻が冷えて骨にしみた。
農家のおばあちゃんたちの中に友人と私の二人。体が冷えてつらい作業でしたが、そこで聞かされた話は生きた歴史でした。戦前から戦中、戦後と農村の女には厳しい時代。隣村の知らない男へ有無を言わせず嫁がされ、しゅうとめにいじめられた話。体を壊した夫に代わり、一家を支えるため重労働に耐えた日々。農地解放で自分の田

■留学中に農業体験 おばあちゃんの苦難の歴史に心動く

畑が持てたときの喜び。私を知っていた日本とは別の世界でした。悲しい話が多いのですが、おばあちゃんたちの目はキラキラ輝いていた。なんてすてきな人たちなんだろう。「原(けん)日本人」。後に知り合う作家で編集者の磯貝浩さんはそう呼びました。
この人たちが亡くなったら消える貴重な話をまとめたかと思つた。留学を終えたらカナダで弁護士を目指そうかとほんやり考えていたのですが、その夜に自分がやりたいことがはつきり見えた。これを契機に日本滞流が始まった。長野県の黒姫山のももとして農業の傍ら古老の話を採集。大学で教壇に立つ一方で、環境保全型農業にかかわる。地球温暖化に警鐘を鳴らす国連の氣候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書の政府レビュー作業に協力、東京・隅が関に通い詰める。もうひとつ強く心を動かされたことがありました。熊本大は二回目の日本滞りで、高校時代の八二―八三年に大阪にホームステイをしました。その間の五年で日本は急激に変わっていました。かつてはコンビニエンスストアもなく、ピーナツバターも手に入らなかつた。それが道の両側でコンビニエンスが競い合い、スーパーへ行けばモノがあふれている。こうした変化は日本のサクセスストーリーかもしれない。不安を感じましたが、不安を感じました。急激な変化で必ず失うものがある。食文化や農村はどうなるのか、親子で価値観に大きな溝が生まれるのではないかと。農漁村から日本の変化を見たいと思いました。成長に輝く「あっちの日本」ではなく、「こっちの日本」からです。
聞き手は 編集委員 滝順一

農村漁村研究家 あん・まくどなるどさん

カナダ・マニトバ州のウィニペグで家族七人で暮らしていた。十五歳。世間知らずのくせに生意気なところ。留学プログラムに応募した。ある日、電話がかかってきて「日本に決まりました。二週間後の出発です。両親の了解をとってください」。母親は大反対だった。

学生時代に海外暮らしを経験しろと両親は口ごもるから言っていました。でも母にとって日本は異国すぎました。姉の留学先はオランダでした。「言葉が通じるところ」と考えていたようです。私が小学生のころ、父の仕事でスウェーデンに住んでいたのですが、「欧州は知っている。次はアジアだ」と思い込んでいました。母と大げんかです。

帰宅した父に話すと、許してくれました。「ただしエ父が言うには」異



子ども時代、家族と二種に「本人は左端」

サトヤマを世界に ②

なる文化に入るのだから壁にぶつからざる。そのとき、落ち込んだ理由を日本人のせいにはしないこと。あなたが選んで飛び込むのだから」。

その通り。父が言った通りになりました。日本に来てから何度も壁にぶつかり、日本人を理解不能だと思ふこともたびたびでした。私がかががちの西洋的価値観で育ってきたからでしょう。今でもぶつかっています。

父親はウクライナからカナダに入った開拓民の二代目。マクドナルドという姓は移住後に祖父が選んだという。農業や歴史への関心、自助の精神や不合理な扱いに対する反抗心は両親から受け継いだ。

電気も水道もない開拓地で父は農業の手伝いをしながら、中学・高校を通信教育で卒業しました。成人し農業を継ぐ段になって体を壊し、家は父の弟が継ぎました。父は農業専門学校へ通い、成績優秀だったので奨学金を得て米国の大学、大学院に進学し博士になりました。なぜ農家の息子が博士号をとるのか、祖父は「くくなるまで理解しなかつたそうです」。

米国で母と知り合い結婚。帰国してマニトバ大学の先生になり、カナダの農学関係の学会長まで務めました。七十五歳の今も、自宅で研究生活を

15歳、カナダから留学 父は「壁ぶつかっても日本人のせいにするな」



続けています。

母は結婚のころ、米イリノイ州の高校で歴史を教えていました。今では考えられないですが、一九六〇年代初め、妊婦は教室に立ち入り禁止だったそうです。母は妊娠後も教壇に立って最後は解雇されました。ケネディ大統領の熱心な支持者だった母は時代遅れの決まりに反発し、自分から辞めるとは言わなかったのです。

八二年、私は子守や芝刈りのアルバイトでためた七万円を懐に、河内長野市(大阪府)にホームステイしました。学校では二週間は人気者でした。全校の生徒が私を見にきました。髪の毛や肌に触らせてと言われ、まるで動物園。少し怖かったけれど、注目を集めるのは悪い気はしません。しかし、すぐに潮が引くように人が遠ざかっていきました。そうやって私は気づきました。友達をつくるには言葉ができないといけない。私は全く日本語が話せませんでした。

学校では孤独でしたが、滞在先の家族には親切にしていたきました。同じ年と三つ年上の姉妹がいて、特にお姉さんとは意気投合しました。一年間の滞在が終わった時には「さよならは

■人気は2週間だけ、言葉できず孤独 勉強し直して再訪日

言わない。来年カナダで会い、ヒッチハイクで世界を旅しよう」。そう言って別れました。帰国後、文通を続けたものの再会はないままでした。八三年のクリスマスころ、河内長野のお母さんから電話があり、彼女の急死を知りました。不意打ちでした。電話の後に絵がきが届いたくらいでした。私はしばらく混乱していました。彼女の死を受け入れるのは難しいことでした。

日本での「強烈な一年」の何が日本へのこだわりになったのだろう。プリティッシュ・コロンビア大学に進学し東洋学を専攻する。

きちんと日本語を勉強して日本を再訪したかった。三年生の時に奨学金をもらって熊本大学に留学しました。河内長野を訪ねて、懐かしい家族の人たちと一緒に広島に旅行し、彼女の墓前で手を合わせました。

(聞き手は 編集委員 滝順一)



フォーカス

日仏交流
九月下旬
五十周年記
セーヌ——
ッセージニ

農村漁村研究家 あん・まくどなるどさん

熊本大学で日本の農業と農村社会に関心をもち研究テーマに決めた。つてを探って長野県信濃町の黒姫山の山すそに富夢想野(とむそうや)塾という私塾の存在を知り入塾する。作家・写真家であり出版社も経営した磯貝浩氏が主宰。自然の中でコンピュータを活用した出版を試み、民俗学の研究も進めていた。

まき割りや雪かき、草刈り、鶏の世話など働きながら学びました。学ぶといっても、編集者の人たちが仕事を終えた夜にビールを飲みながら雑談するのを聞く。舎主の磯貝さんは「独立自傳の精神」と言って、塾生が自分でテーマを見つけ自分で学ぶことを大方針にしています。

強烈に覚えていることがあります。明治・大正生まれの職人さんたちの聞き取り調査をしようと、リストをつくって取材の申し込みに電話をかいたら、どこもすぐに切られてしまう。片言の日本語だからいたずらと思



富夢想野塾では働きながら学んだ「清水弘文堂書房」提供

サトヤマを世界に ③

わたたのです。編集者の一人に電話してもらった。そこへ磯貝さんが現れました。「なぜおまえがやらない」と尋ねるので「日本語が下手でできない」と答えると、「そんな言葉をここで聞きたくない。できないなら国へ帰れ」。私は一軒ずつ訪ね歩くことにしましたが、結果的にはそれがよかったです。

塾の図書館で柳田国男や宮本常一らの著作を読んで、文化財保護委員会編集の手引を参考に手探りでお年寄りたちのインタビューを始めました。竹細工、桶(おけ)づくり、鎌鍛冶(かまかじ)など農機具や生活用品を作り続けてきた職人さんに会えました。どなたも孫娘に話すように外国人の私に話してくれました。

堂々として自分の生き方に誇りを持ち、今の多くの日本人より「国際人」の感じます。ここでも日本社会の変化の速さが心配になりました。この人たちが亡くなったら、何世代にもわたって農家の生活を支えてきた職人技が消える。「どう思っているのですか」と尋ねてみながら、人を困らせました。

一九九〇年 豊田にいった

■長野の私塾でまき割り・雪かき 調査のアポ入れ、人に頼み主宰激怒



んカナダに帰国した。「日本人とのつき合いに疲れた」。ブリティッシュ・コロンビア大学を卒業後、九一年にアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(横浜市)の研究生として黒姫に舞戻る。翌年、磯貝氏や友人の協力を得て、熊本と長野の体験をまとめた「原日本人挽歌(ばんか)」を出版。そのあと予想外の事件が起きた。

九四年二月、富夢想野舎のサウナから出たペラントで、居住棟から火が出ているのを見つけた。慌てて一九番しました。塾は冬休みで人はほとんどいません。新雪が一・五センチほど積もっていました。待てども消防車が来ません。

もう一度かけると、つたない日本語の第一報だったせいか、いたずら電話と思われるいたずら電話です。けが人はなかったものの、写真や取材ノートなど貴重な資料が失われました。

職人さんの決断で塾は解散。九七年に私は宮城大学で留学生に「日本事情」を教える専任講師になりました。初代学長を務めた経営学者の野田一夫先生から出がかった縁です。初めて毎月決ま

■明治・大正の職人 一軒ずつ 誇り持つ姿、今の人より「国際人」

った日にお給料がもらえない生活は夢のようにでした。学校で教える傍ら、米どころの宮城で農業にかかわり考える機会ができました。

磯貝氏と、次男の磯貝日月(ひづき)氏(清水弘文堂書房代表取締役)とは何度も取材旅行をともにした。二〇〇六年にはカナダ・極北地方に住む約二百五十人にインタビュー、暮らしぶりを取材。また先住民イヌイットと彼らが住むヌナブト準州についての書籍の邦訳出版でカナダ観光局から賞をもらう。その磯貝浩氏が昨夏、急死した。

極北の民の原稿が七割がた完成、カナダ大使館で写真展を開きました。オープンングパーティーの夜に奥様とも一緒に談笑したのが最後、突然倒れてから三日で旅立ちました。先住民の本の出版が磯貝さんから最後にもらった宿題です。

(聞き手は) 編集委員 滝順一

フォーカス

70市区町 全国の市区 秋、一街道交流 旗揚げし、 人を超えた。



農村漁村研究家 あん・まくどなるどさん

作家・写真家の磯貝浩氏(故人)との間には、カナダ・極北の民のリポートとは別にもう一つ進行中のプロジェクトがあった。日本の海岸線を一周する漁村実地調査だ。漁業者の生活と宗教観、漁村から見た市場経済や地球温暖化など、現場で見聞きし考えたことを国立民族学博物館の「季刊民族学」に「海人万華鏡」と題して連載を始めた。ある回ではこう書いた。「漁村にいるといつも『死』が添い寝しているような気分になる」

軽自動車を改造したキャンピングカーで海岸線の八割は回りました。ボディーに私の名前を書いたら和菓子屋さんと間違われました。北海道日町のスケソウケラ漁、新潟県真野町(現佐渡市)の刺し網漁、富山県北浦町(現延岡市)のキヒナゴ漁など各地で多くの方々が拒否反応を示さず船



キャンピングカー「あん・まくどなるど」は和菓子屋と間違われた

サトヤマを世界に ④

に乗せてくれました。宮崎のキヒナゴ漁は午前三時過ぎに海に出る夜明け前の漁です。網をおいたら大漁。でもそれくらいが大問題。どこの市場に持ち込むかです。市場によって、また午前と午後ではセリの価格が違ふ。私が乗った時は十倍以上の差がありました。博多・中洲の飲食店で供される時の目の色、鮮度が命だからです。

今拠点としている金沢市の中央卸売市場は国内でも早くセリが始まる魚市場の一つで、日本海産物だけでなく全国から海産物が集まります。例えば北海道からは航空便でカニが届き、セリにかかった後、北海道に降ります。高い値をつける市場に送られ再び産地に帰る。私にとっては奇々怪々、そんな「市場という迷宮」に日本の漁業者は毎日向かい合っています。

宮城大学では学生たちと三回にわたってカナダの水俣病の現地調査をした。

水俣病に似た有機水銀汚染がカナダにもあることを知りました。製紙会社の廃水で下流に住む先住民が病に侵されました。一九六〇年代に問題になりましたが、私は知りませんでした。恥ずかしながら、故郷のことは何でも知っていると感じていました。

最初に母と汚染地帯に行き、そこで「私たちは

日本の海岸線8割回る カナダでも水俣病、知らなかった

日本人に助けられた」という声を聞きました。カナダ政府が水銀汚染を認めない段階で、熊本から原田正純先生(現在は熊本学園大学教授)ら日本の医師が来て診療してくれました。患者の多くは汚染地帯での農業をやめ政府の助成金で暮らす現状です。政治・経済・社会的に弱い立場にあります。継続的に見ていく必要があると感じて学生を連れて調査なども進めました。

流ちょうな日本語を話しつつもユニークな表現が時折飛び出します。「頭の中が電音状態」もその一つ。宮城県松山町(現大崎市)に旧家を借りて大学で教えたつ、地元の水産物が中核となり進める減農薬農業にかかわる。その一方で全国漁港巡りに取り組み、さらに国連・気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の活動にも、まさに電音状態である。

大学への通勤範囲内で日本家蔵を探していたら、酒蔵の1ノ蔵の鈴木和郎会長(故人)から電話があり、松山町内の六百七十坪(約二千二百平方尺)もある旧武家屋敷を紹介していただいた。

人間発見

減農薬で酒米づくり 化学製品頼み、自然へのまなざし曇らす

その縁で同町の酒米研究会にも加えてもらった。農家の有志が1ノ蔵と契約して農薬や化学肥料を減らした酒米栽培に挑戦しています。減収への不安があったと思いますが、酒蔵がリスクを負う形で環境保全を考えた農薬を模索しています。

田植えのころの水田は本当にきれいでした。水をたたえた田んぼは湖のよう。巨大なグレイプフルーツのような満月が田んぼに昇ります。

研究者の中には農薬が環境破壊の元凶だと言う人もいます。私はそこまですいません。しかし石油や化学製品に依存した農薬が自然との間に溝をつくってきた事実も見逃せません。その結果、農家が周囲の自然に向けるまなざしが曇っているような気がします。生意気を言わせてもらえば、戦後の日本はあまりモノを考へなくてもできる農薬を育ててきましたが、これからは強いプロ意識を持つ農家が必要です。

(聞き手は 編集委員 滝原一)

フォーカス



厚生労働省 環境省、初出身者が務める 省の事務次官 庁からの生ええ

農村漁村研究家 あん・まくどなるどさん

国連は世界の様々な生態系を調べあげる計画を進めている。砂漠や熱帯林などの自然とそこに住む人々とのかわりを科学者を動員して調査している。これは地球温暖化を総合的に分析し警鐘を鳴らした気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の生態系版を

目指す動きだ。その一環で日本の里山・里海を対象にした調査が今年から本格的に始まった。最初は北信越(北陸と信越)を対象に構想が充て、最終的には日本全国を対象に調査が始まりました。北信越のほか、北海道・東北、関東・中部、西日本の四ブロックに分け作業が進んでいます。私が所長を務める国連大学高等研究所のいしかわ・かなざわオベレーティング・ユニットは北信越

サトヤマを世界に ⑤

が調査地域。こうした研究組織を持たない他ブロックとはひと味違った任務を負っています。里山・里海の生態系を調べるだけでなく、その作業を自治体や地域の人々の力を合わせたボトムアップで進めることです。先進国では大学や国の研究機関が中心となつて調査を進められますが、途上国では農業や漁業の現場に直接かかわってきた人たちの知恵を頼りて進めなければなりません。私たちの取り組みが、これからアジア各地で里山的な環境の調査を進めるモデルケースになると考えています。

オベレーティング・ユニットは石川県と金沢市の強力な支援を受けている。また日本全体の調査をまとめる科学委員会の共同議長を務める金沢大の中村浩二教授が頼りになる相談相手になつてい

る。五月下旬にドイツのボンで開いた生物多様性保護条約の締約国会議で、国連大学高等研究所や環境省などの主催でシンポジウムを開き、谷本正憲石川県知事にも来ていただきました。北陸の自然をPR、会場で種子原みこはら)米など里山の恵みを配り好評でした。



石川県漁協女性部通常総会でメンバーと談笑する(右から2人目)

五月下旬にドイツのボンで開いた生物多様性保護条約の締約国会議で、国連大学高等研究所や環境省などの主催でシンポジウムを開き、谷本正憲石川県知事にも来ていただきました。北陸の自然をPR、会場で種子原みこはら)米など里山の恵みを配り好評でした。

日本の里山調査、国連が本格始動 地元の人たちの知恵が頼り



里山・里海の生態系報告書は二年後に名古屋で開かれる生物多様性保護条約の十回目の締約国会議に提出する予定ですが、提出して終わりではなく、報告が政策づくりにつながるのが私たちの望みです。ボンの会場にいらしたアセアン生物多様性センターワイリレンの所長が「政策関係者との連携が早期からあるのは素晴らしい」と励ましてくれました。人間の手が入って保たれる自然環境が里山・里海であると定義するならば、そうした環境は日本だけではなく世界各地にあり、それぞれ多様な形で人と自然がかかわって生態系が保たれているはず。人の手が入らなくなったら生態系はどう変わるのか。いったん崩れた人と自然の関係を取り戻すにはどうしたらよいか。日本に限らず普遍的な課題だと思えます。

四月、まだ風が冷たい能登半島珠洲市の浜辺に横濱浜式塩田を営む角花さんを訪ねた。砂に丁寧に海水を散布し天日で水分を蒸発させて濃い塩水をつくる。千年以上続く塩づくり

塩田の主さえ天気読めぬ日々 問題解決のヒント、アジアから

は国の無形文化財に指定されている。短パンにはだして塩田を歩く角花さんは日本海空を見上げて「二気が読めない」と話しました。天気が移ろいやすい日本海ですが、角花さんは長年、五感を傾け天候を読んでこられました。そんな方にも最近はや予測が難しくなっているようです。

昨年、IPCCが「気候の温暖化には疑う余地がない」と、強い危機感をにじませた報告をまとめました。しかし途中経過をみていると、もっと強いメッセージが出せただはずだと思いが消えませんが、科学者がまとめた報告が最終段階でいふん弱められました。

その一方で思うのはIPCCが欧米の価値観を色濃く映した組織であることです。かわる科学者の多くが欧米人だからです。アジアの声がもっと強く反映されていいと思います。地球温暖化と食料生産、生物多様性保護の問題は複雑にからみあつたもの集のようです。アジアからの情報発信が、からまった結び目を解くヒントになれば素晴らしいと思います。最後に、私の名前ですが、まろやかな表現ができる平仮名が好きです。長年使い、私のアイデンティティーの一部です。(聞き手は 編集委員 滝順一)